

㊦B—54 絹の洗たくに関する研究 第8報  
洗たくの処理条件と絹布に発現するラウジネス欠点との関係

農林省蚕糸試験場 ○皆川 基  
学習院女子短大 齋藤 道春  
菅原 珠子

1. 反復して行なわれる洗たくや、やり方の悪い洗たくなどにおいては絹特有の光沢を消失し、また汚れた感じを与える（特に濃色に染色された絹布を洗たくした際）現象が認められる。これは織物の表面に発現する細繊維のもつれた糸層によるものであり、洗たく時における物理的作用などによっても容易に発生するので洗たくの処理条件とラウジネス欠点の発現関係を明らかにし、絹の洗たく方法の改善を計ることを目的としている。

2. 洗たく処理回数（1～30回）、洗たく方式（もみ洗い、はけ洗い、つかみ洗い、電気洗たく機洗い）、洗剤の種類（6種）などが、それぞれ異なる試布（16匁付羽二重）を作製して光学顕微鏡ならびに電子顕微鏡下で観察し検討した。

3. 1～5回程度の反復して行なう洗たく処理では、その方式によらずラウジネス欠点の発現が比較的少ないが10回以上反復するとほとんど織物の全面に発現する。また、一般に洗たく時に発現するラウジネス欠点はタテ糸上に多く、ヨコ糸状に少ないことが認められた。洗たく方式との関係についてみると、もみ洗い、電気洗たく機洗いの場合に発現し易く、つかみ洗い、はけ洗いの場合では、前者に比し比較的発現が少ない傾向がある。またもみ洗いにおいては織物組織のみだれが多い。洗たくに用いた6種の洗剤間にはラウジネスの発現にあまり明確な差異は認められなかった。